

フ ォ ー ク ナ ー の 『 熊 』

——アメリカ小説の一原型——

元 田 脩 一

実際にアメリカに足を踏み入れたら、諸君は傷つけられる。なぜなら、アメリカは白人の心に強力な崩壊作用を及ぼすからだ。それは、齒をむき出して鎮まることのない原住民の邪神や亡霊にみちており、復讐の女神のように、白人がその絶対性を放棄するまで白人をせめさいなむのだ。そこには潜在的な暴力と抵抗が充満している。……だが、いつかはアメリカの邪神は鎮められ、亡霊はなだめられ、土地の精は和らげられるに違いない。そのときにこそ、アメリカの大地に対する真の熱烈な愛があらわれるだろう。(1)—— D・H・ロレンス

1

アメリカ小説の伝統的な諸特色は、既に多くの人々によつてあげられているが、それらの特色の中で最も顕著なものは大体次の三人の批評家たちが指摘することに網羅されているといつてよい。

まず、L. A. フィドラーの所見を引用しよう。

われわれの『ボヴァリー夫人』は、われわれの『アンナ・カレニナ』は、われわれの『誇りと偏見』や『虚栄の市』はどこにあるのだろうか？……われわれの小説の典型的な男性の主人公は、常に森や海や河や戦いへ——‘文明’を避けうる場所へ—— 悩み逃亡した人物であつた。いいかえれば、性と結婚と責任にまきこまれるような男女の対決が起りえないところへ逃避した人物なのだ。われわれの傑作における主題と形式を決定している要素の一つは……こうした自然や少年時代への退行である。(2)

また R. チェイスはいう。

アメリカ小説はその詩的特質のゆえに知られてきたが、その詩的特質は、韻文のもつ詩情ではなく、家庭小説や自然主義小説の詩情でもなく、実にロマンスの詩情である。(3) …

(1) D. H. Lawrence: *Selected Literary Criticism*, p. 318 (William Heinemann Ltd.)

(2) Leslie A. Fiedler: "The Novel and America", pp. 44-5 (*Partisan Review*, Winter 1960)

(3) Richard Chase: *The American Novel and its Tradition*, p. 17 (Doubleday Anchor Books)

…われわれが‘ロマンス’と呼んでいる小説の詩的特質の源泉は、処女地と素朴な生活に対する郷愁なのだ。……⁽¹⁾

‘ロマンス’は、例の E. ミュアの言葉をかりれば「その本質として正常な文明生活からの逸脱を暗示している」⁽²⁾ 作品のことであり、‘リアリズムの小説’とは全く対照的な特徴をもつ。リアリズムの小説が常に実際の生活を対象とし、時間的にも空間的にも現実というものに制約され、複雑な個性と社会性をもつた人物像を描き出すのに反して、ロマンスは現実の拘束をうけることが少なく、その舞台はしばしば実際の社会から離脱し、冒険談的な色彩が強い。ミュアはこのロマンスをあらゆる種類の小説の中で、最も単純でかつ低級なものに見做した。確かにそれは英国の小説に関しては事実といえよう。だがチェイスは、アメリカ文学においてはロマンスが高度に発達し極めて深い意味を表現していることを指摘して、「アメリカ小説の傑作の大多数はロマンスだ」⁽³⁾といい、アメリカ文学におけるロマンスの注目すべき特徴を次のように説明している。

(ロマンスにおいては)人物の性格そのものは、かなり抽象的かつ理想化されたものとなり……小説とは違いロマンスは現実を忠実に描くわけではないので、はるかに容易に神話的、寓話的、象徴的なものに変る傾向がある。⁽⁴⁾ ……そして、その抽象性と深さそのもののために、ロマンスは普遍妥当の道徳的真理を公式的にあらわすことが可能なのだ。⁽⁵⁾

さらにまた F. I. カーペンターは、アメリカ小説には原始主義の理念が強いことを指摘し、原始主義 *primitivism* を次のように定義している。

原始主義は、‘自然’とか‘園’によつて象徴される‘大地’への復帰を暗に意味している。そしてこの復帰は、実際の農夫の大地に対する復帰であるばかりではなしに、存在の根源的状态への復帰でもあるのだ。……アメリカの原始主義は、人生の基本的原理に帰ることを強調してきたのである。⁽⁶⁾

以上の批評家たちが列挙した諸特色は、次のように要約することができよう。すなわち——アメリカの小説に見られる最も根本的な特色は、文明社会から自

(1) *Ibid.*, p. 65

(2) Edwin Muir: *The Structure of the Novel*, p. 21 (Hogarth Press)

(3) Richard Chase: *The American Novel and its Tradition*, introduction xii (Doubleday Anchor Books)

(4) *Ibid.*, p. 13

(5) *Ibid.*, introduction xi

(6) Frederic I. Carpenter: "The American Myth, Paradise (to Be) Regained", p. 605 (PMLA, December, 1959)

然と過去への逃避の傾向であり、その傾向は、自然における基本的な生活への復帰の主張とそれに対する郷愁と、普遍的美徳の的確な把握を生み出し、それらが極めて濃厚にあらわれている反面、女性や社会に対する対決によつて惹起される葛藤は極度に無視されている——と。そしてわれわれはこれらの特色の底に、実際のアメリカ人の行動とは奇妙なほど矛盾した心理的傾向を読みとることができるだろう。われわれの目に映る現実のアメリカ人の外見は、文明の建設者であり、社会進歩の推進者であり、未来の信奉者であり、高度に機械化された生活様式と恋愛の讃美者である。だが、アメリカ小説の特色からうかがわれる彼らの心理的傾向は、そうした彼らの外的態度にあまりにも背反しているのだ。そしてさらにこの心理的傾向は、アメリカ小説の伝統的特色が最も高度にかつ純粹にうち出された次の四篇の小説では、より明確な願望と憧憬と理想としてあらわれているのである。それらの作品は、フェニモア・クーパーの『鹿射ちの名人』(*The Deerslayer*, 1841年)と、マーク・トゥエインの『ハックルベリー・フィンの冒険』(*The Adventures of Huckleberry Finn*, 1884年)と、フォークナーの『熊』(*The Bear*, 1942年)、ならびにヘミングウェイの『老人と海』(*The Old Man and the Sea*, 1952年)である。ここには共通の三つのイメージが、くりかえしあらわれているのだ。そしてそれらのイメージは、これらの作品にくりかえしあらわれるごとに、いよいよその形態と性格を鮮明にしてきたのである。それはいわば、これらの四人の作家の共同の創作ともいえるのだ。それらのイメージの一つは、文明社会がつくり出される以前に、人類が自然の生活においてかちえたところの、謙譲と勇気と忍耐と同情と愛と誇りという美徳の具現者としての孤独な老人の像である。この老人は文明の疎外者なのだ。合理主義やデモクラシーや科学についての知識は、彼には皆無だ。そして彼がその美徳を発揮するのは、原始林や河や海などの自然という場においてである。この老人のイメージを「老いたるアダム」と名づけよう。具体的にはこの「老いたるアダム」のイメージは、インディアンの酋長を父とし、黒人奴隷を母として生まれ、原始林で大熊を追う老いたる猟師のサム・ファザーズ Sam Fathers と、ミシシッピ河の筏の上で星を見上げる逃亡中のニグロのジム Jim と、メキシコ湾流に小舟を浮べて一人で魚をとる老漁夫サンチャ

ゴ Santiago によつて描き出されている。

もう一つのイメージは、「老いたるアダム」がもっている人間固有の美德を、自然という場において体得する若者の像である。人類が原始の自然という生活環境を生きぬくことによつて、除々に美德を獲得していつたように、この若者も、文明によつて汚染されていない原始的な自然の中に生き、赤裸々な自然との接触を通して次第に美德を修得していく。そして、人類が美德を獲得したのちに自然に対する従属的状态から脱却し、文明社会をうちたてたように、彼もまた美德を修得し終えたのち自然を離れ、文明社会に足を踏み入れる。しかし彼は、文明社会が不正と偽善にみちていることを知り、社会の因襲や文明規範を容認することはできず、自分が美德を体得して精神的に生まれかわつた場——すなわち彼の母なる自然に対して郷愁を感じずにはおれない。

いいかえれば、彼は自然において精神的再生をおこなうわけであるが、重要なことは、実は彼は「老いたるアダム」か、あるいはインディアンの部族によつて原始的自然に導入され、その中で生きていく方法を彼らから学び、彼らが発揮する美德によつて開眼するということだ。自然がこの若者の母であれば、「老いたるアダム」ないしインディアンは彼の精神的な父親である。だが、美德は学ぶことも教えることもできない。それはあくまでも、みずから体得すべきものなのだ。若者は「老いたるアダム」やインディアンを教師とし、原始的自然を教場として美德を修得して世に出る。「老いたるアダム」やインディアンが自然から離脱することのない文明の疎外者であるのに反し、この若者はそれを乗り越えて文明社会に姿をあらわすところの、生まれかわつた文明人であり、文明社会の批判者である。しかし、彼の批判は個人としての道徳的批判に終始し、彼が文明社会に対する政治的経済的批判者として行動することは決してない。そして彼は年をとるにつれ、文明憎悪者となり、文明社会からの逃避者となつていく。この若者のイメージを「若きアダム」と呼ぶことにしよう。この「若きアダム」のイメージは『熊』のアイク Ike (Issac) と、『鹿射ちの名人』のナッティ Natty Bumppo と、『ハックルベリー・フィンの冒険』のハック Huck (Huckleberry Finn) とによつてあらわされている。

さらにまた、「老いたるアダム」がその美德を発揮し、「若きアダム」が美德

を体得する場としての原始的自然のイメージこそ、これらの作品によつて描き出された「エデン」なのである。

くりかえすまでもなく、これらの「老いたるアダム」と「若きアダム」と「エデン」のイメージは、四人の異質の大作家が製作年代を異にしてつくり上げた老若二人の理想化された人間像と一つの理想の世界である。したがつてわれわれは、これらのイメージこそ、アメリカ人の心奥に潜むところの、最も真摯な理想と願望と憧憬の象徴像と考えずにはおれないのだ。「エデン」は、文明社会確立以前の、自然における人間の基本的生存状態への彼らの復帰願望のあらわれであり、「老いたるアダム」は、その基本的生存状態において人類が体得した美德に対する彼らの憧憬の表明である。そして「若きアダム」は、そうした基本的状態に復帰し美德を体得して精神的再生をとげんとする彼らの無意識的な理想を示す。美德の具現者としての「老いたるアダム」のイメージが、インディアンとニグロの混血であるサムや、黒人奴隷のジムによつて描き出され、『鹿射ちの名人』においてはその役がインディアンのデラウェア族 *Delawares* とヒューロン族 *Hurons* によつて演ぜられ、また「若きアダム」のイメージを描き出しているアイクとハックとナッティがいずれも純粹の白人であるということは、これらのイメージが原始的自然と文明社会との激突を意味するところの約三百年にわたるフランティアのたえざる西進と、インディアンやニグロの精神的特質に対するアメリカ人の心理的葛藤というアメリカ独自の歴史的体験から生み出されたものであることを物語っている。実にこれらのイメージは、民族としてのアメリカ人の歴史的体験が彼らの心の奥底に刻みつけた願望充足の型なのである。もし「神話が民族の切望と記憶の具現として定義しうる」⁽¹⁾ ならば、「エデン」と「老いたるアダム」と「若きアダム」のイメージによつて展開される物語は、アメリカ人の心底に潜む憧憬と願望と理想を象徴する神話にほかならず、それはまた、原始的自然の消滅とインディアンの追放とニグロの奴隷化の上に着たてられた巨大な物質機械文明に対するアメリカ人自身の批判であり、その建設の歴史に対する彼らの反省であり、彼らの良心の叫びともいえる

(1) Marius Bewley : *The Eccentric Design*, P.96 (Columbia University Press)

だろう。そしてその民族の神話を最も明確にうかがうことのできる作品がフォークナーの『熊』なのである。『熊』には、原始的自然におけるアメリカ人の理想の精神的再生過程が——すなわち、かくあるべきであつたところのフロンティアの精神史が象徴的に描き出されているのだ。この原始的自然におけるアメリカ人の精神的再生の神話という観点に立たないかぎり『熊』の意味を理解することはできない。W. V. オコーナーが『熊』における荒野の精神の取扱いを、「それは一種の神経症患者の夢であつて、現実の不正を解決せんとする意図というよりはむしろそれからの逃避である」⁽¹⁾と述べているのは、文学を社会不正の是正手段とする誤謬を犯しているばかりではなく、民族の神話としての『熊』の象徴的意味を全く看過したものといえるだろう。「ナッティ・バムポーを社会的義務からの逃避者として非難することは、ハックルベリー・フィンを少年犯罪者として非難することとおなじように事実から離れている」⁽²⁾というM・ビューレイの言葉は、このオコーナーの『熊』に対する非難に関してもあてはまるだろう。

2

周知のように、フロンティアは原始的自然と文明社会との接点であつた。そしてその歴史は、文明社会の拡大による原始的自然の消滅の過程であり、F. J. ターナーによれば、アメリカ的性格の形成過程でもあつた。しかし、『熊』から読みとることのできるフロンティアの歴史は、原始的自然における白人の理想化された精神的再生の過程である。以下かくあるべきであつたアメリカ人のフロンティアにおける精神的再生過程の第一段階——文明人としての死と古代人の世界への復帰——を述べよう。

最初に新大陸に渡つてきた白人たちの背後には、汚濁と偽善にみちたヨーロッパの文明社会があり、彼らの眼前には、無垢と野性の原始的自然が横たわつていた。彼らとその蛮神の住む荒野で自然の狂暴な力に対応して生きていくに

(1) William Van O'Connor : "The Wilderness Theme in Faulkner's *The Bear*", in *William Faulkner, Three Decades of Criticism*, P. 330 (Michigan State Univ. Press)

(2) Marius Bewley : *The Eccentric Design*, P. 107 (Columbia University Press)

は、自分たちの育つた文明社会での生活と心理をことごとく捨てさり、インデアンとおなじ生き方と心構えをしなければならなかつた。そうしないかぎり、原始的な生活環境の中で生存していくことはできなかつたのである。そのためには、インデアンから生きていく方法——知恵——を学ぶばかりではなしに、彼らとおなじ精神を体得しなければならなかつた。それにはまず、自然の無気味な恣意と底知れぬ猛威に直面して彼らを感じた恐怖と、彼ら自身の非力に対する絶望感とを克服しなければならなかつた。そのためには、彼らの合理的思考や知性や自負心のすべてを捨てて、自分自身を完全に自然にゆだねなければならなかつた。それは文明人からすれば、自然の狂暴な意志と力に徹底的に服従したことであり、明らかに文明人としての死であつた。しかし、彼らは文明人として死ぬことによつて、自然人として生まれかわつたのである。なぜならば、彼らはそのとき、原始的な自然という生活環境に存続していくための必須の条件であるところの、自然の意志と力に対する謙譲と、それを耐えて生きぬくための忍耐と勇気とを体得したからである。いうまでもなく、この謙譲と忍耐と勇気は、彼らがかつて文明社会においてもつていたものとは次元の違う新たな美德であつた。それは彼らの遠い祖先が、自然の意志と力とに対する順応適合の過程において身につけた美德だつたのだ。すなわち、彼らは人間存在の基本的状態に復帰したのである。古代人の世界と心理にたちかへつたのだ。同時にそれは、新たな精神的人間としての再生への出発でもある。以後彼らは、彼らの祖先が、いや、あらゆる種族が自然における生活を通して体験した精神発達の過程をくりかえすのである。が、それを述べる前に、この古代人の世界と心理について一言しておかねばならない。

古代人の世界では、人間は完全に自然に支配されていた。人間は世界の主人どころか、多くの動物にも劣る存在でしかなかつた。そしてあらゆるものが、靈魂と力とをもつていた。このことは、原始心性 *primitive mentality* と呼ばれる彼らの心理機能に起因していた。C. G. ユングは「(古代人の心には) われわれの心にみられるような主体と客体との絶対的区分は存在しない」⁽¹⁾ とい

(1) C. G. Jung: *The Collected Works* Vol. 8, pp. 153-4
(Routledge and Kegan Paul)

う。彼らは自我意識が未発達であつたために、外的事象を、それによつて惹起される彼ら自身の心理を投影して把握したのだ。そこで彼らは、自然の意志と力の顕現である自然現象を、偉大な威力をもつた様々の精霊すなわち神々の活動と思ひ、あらゆる動物の本能の働きを、動物に宿る靈魂の力のあらわれと信じたのである。鬱蒼とした大森林は、彼らに畏敬と崇拜の念を起させたに違いない。彼らはその心理を投影して、広大な森を偉大なる精霊の住み家と信じたのだ。そしてその森に出没する巨大な熊は、森の精霊の化身にほかならなかつたのだ。この古代人の原始心性への心理の退行が基本的生存状態への復帰であり、またそれは謙譲と忍耐と勇気という新たな美德の体得を意味するのだ。ここまでが原始的自然における白人の理想化された精神的再生の第一段階であるが、これまでの段階はどのように具体的に『熊』に描かれているのであろうか。

『熊』は、1942年の5月9日に“サタデイ・イーヴニング・ポスト”に発表され、同年に改作されて『モーゼよ、降りて行け』(Go Down, Moses)の中に収録されたものであるが、その舞台は1870年代から80年代にかけてのミシシッピ州の荒野である。当時そこには人類の記憶よりもさらに古い大森林がまだ残つていた。その原始林に一人の老いたる獵師が生きている。彼はインディアンのチカソー族 Chickasaws の酋長を父とし、黒人の奴隷を母として生まれ、以前は、キャロザーズ・マツキャスリン Carothers McCaslin という大農場主の奴隷だつた。このサム・ファーズ Sam Fathers という混血の獵師には、子供もなければ家庭もない。大森林のそばに小さな小屋をたてて一人で住んでいる。が、彼の生きる場は、その太古の森林の中なのだ。そこには彼とおなじように「孤独で、不屈で、ただ一人で、妻も子もなく、死の運命をまぬがれた老いたる熊」⁽¹⁾——オールド・ベン Old Ben がいる。その老いたる大熊が彼の兄弟であり、大森林が彼の恋人であり、妻でもあるのだ。彼はニグロとインディアンの精神的特質の継承者である。「一方では、苦難を通して謙譲を学び、苦難を生きのびる忍耐を通して誇りを知つた民族の長い歴史を受けつぎ、他方では、その民族よりも長くこの土地に住みついている もう一つの民族の連綿と

(1) W. Faulkner: *The Bear in Six Great Modern Short Novels*, p. 329 (Dell Edition)

した歴史の相続人」⁽¹⁾であり、荒野の美德の具現者だ。そして、この老人の美德を文明社会へ連結させる唯一の絆がある。それは毎年その原始林にド・スペイン少佐 Major de Spain の一行に加わつて狩猟にやつてくるアイクと呼ばれる少年——彼のかつての主人である キヤロザーズ・マッキャスリンの孫——アイザック・マッキャスリン Issac McCaslin だ。アイクは、1867年にマッキャスリン家の相続人として生まれた。彼は、サム老人がまだ荒野に移り住むまえから、サムに大森林の話聞き、猟の仕方を教わつていた。そして10歳になったときド・スペイン少佐の一行に初めて加わつて本格的にサムに師事し、「ほんものの荒野での修業者の生活」⁽²⁾に入ったのだ。「サム・ファーズを彼の教師とし、裏庭の兎や栗鼠を彼の幼稚園とすれば、老熊のかけめぐつている荒野は彼の大学であり、……その牡熊自体が彼の母校」⁽³⁾であつたのである。そのアイクの目に映つたサムの容貌は次のように描かれている。「いかめしく、なつかしい、無表情な、が、やがて微笑のもれてくる昔にかわらぬあの顔だ。いつものあの老人の目、見つめていると、その目から柔かで、熱情的で、誇りにみちた暗い強烈な光がゆつくりと薄れていくのだつた。」⁽⁴⁾

しかし、原始林に入った最初の年には、アイクは獲物をとることも、あの大熊を見ることもできない。ある日、猟犬が獲物を追い出し、サムが彼に銃の撃ち金を起して待機するようにいつた。が、「その瞬間は過ぎていた。彼には、まるで煙のようにあらわれ、体をのぼして猛烈に駆けていく鹿が——牡鹿が——森の中に消えていくのが本当に見えるように思えた。」⁽⁵⁾

ある朝、「耳をすませ」とサムがいつた。遠くの方をゆつくり歩いている大熊の足音をサムは聞いたのだ。が、アイクには猟犬たちのおびえきつたヒステリックな声しか聞えなかつた。まもなく帰つてきた十一匹の猟犬たちが、無惨に大熊に打ちのめされているのをアイクは見た。それは、原始の自然が与えたほんの軽い一撃にすぎなかつたろう。しかしアイクは、震えているみじめな犬たちとおなじものを自分のなかに感じた。そのときサムがいつた。「犬どもも、まるで人間とおなじだ。自分が犬という名を失わないためには、遅かれ早かれ、一

(1) *Ibid.*, p. 417

(2) *Ibid.*, p. 330

(3) *Ibid.*, p. 343

(4) *Ibid.*, p. 333

(5) *Ibid.*, p. 331

度は勇敢にならなくちやならないのを知っているんだ。そして、そいつをやりとげたらどんなになるかもちやんと知っているので、勇敢にならなくちやならぬ日を、できるだけ先に延ばしているんだ。」⁽¹⁾ いうまでもなくこれは、原始の自然の底知れぬ猛威に恐れおののいているアイクに対していわれた言葉だ。サムはアイクに一度死なねばならないことを、そして原始林で生きていくに必要な資格を体得しなければならぬことを教えているのだ。それからさらに三日目にサムはアイクを「太古の密林の広大な濃い暗闇」⁽²⁾の真中につれていき、湿地についているあの大熊の巨大な足跡を見せた。そのときほどアイクは「時間を絶した密林に対して自分の脆弱さと無気力」⁽³⁾とを痛感したことはなかつた。こうしてアイクは、原始的な自然の中で生きぬくためには、謙譲と忍耐と勇気とが必要であることを知った。そのためには、アイクは生まれかわらねばならないのだ。実際彼には、彼が原始林に踏み入ったその年に「自分自身が自分の誕生を目撃しているかのように思われた」⁽⁴⁾のである。事実彼の心は、原始林の圧倒的な巨大な威力におしつぶされ、音をたてて崩壊しつつあつたのだ。再生過程は既に始まつていたのである。しかし彼が生まれかわるには、文明の殻をことごとく脱ぎすてて、文明人として死に、自然に対して自分自身を順応適合させたあの古代人の世界と心理に没入しなければならぬのである。だがアイクは、この古代人の世界と心理の象徴であるあの 大熊をまだ見てさえもないのだ。「古えの荒野の生活のまぼろし、その縮図、その神格」⁽⁵⁾であるところのあの オールド・ベンは、アイクが古代人の世界と心理に同化したときに初めて彼の前に姿をあらわすのである。アイクは、オールド・ベンを見なければならぬことを悟る。そして「おれは、やつをじつと見なければならぬのだ」⁽⁶⁾という彼の言葉で十歳のときの荒野での修業は終る。

翌年もおなじように、アイクはド・スペイン少佐の一行とともに荒野に行くが、いぜん大熊は姿を見せない。そこである日、彼は鉄砲をもたずに一人で森林の奥深くいつていく。そして原始林の暗闇の中を、磁石と時計をたよりに九時間も熊を求めて旅をつづける。「彼は既に自分の意志で、自分の要求から、謙譲

(1) *Ibid.*, pp. 333-4

(2) *Ibid.*, p. 335

(3) *Ibid.*, p. 335

(4) *Ibid.*, p. 331

(5) *Ibid.*, p. 329

(6) *Ibid.*, p. 338

と平和を感じながら、悔ることなく、自分自身を放棄していたのだ。が、それだけでは明らかにじゆうぶんではなかつた。…彼はまだ汚染されていたのだ。」⁽¹⁾彼は時計と磁石とを木に吊し、完全に荒野に身をゆだねて、探求の旅をつづけた。「彼は、自分が道を迷つたことを知つたとき、サムが彼に教え、訓練してくれた通りにした。」⁽²⁾つまり、彼が磁石と時計とを吊した木のところへ帰れるように、そこを起点として円を描きながら熊の足跡を求めた。だが、その木のところへ帰ることはできなかつた。「そこで今度は、サムが彼に教え、訓練してくれた第二のことをやつてみた。つまり、今度は前とは反対側にもつと大きな円を描いて歩き、作つた二つの円形がどこかで彼の歩いた道を横断するようにしたのだ。」⁽³⁾しかし、彼が通つた道跡には遂にぶつつからなかつた。とうとう彼は、「サムが彼に教え、訓練してくれたその次の、しかも最後のことをした。」⁽⁴⁾すなわち、丸太に腰をおろして気をおちつけたのである。と、そのとき彼の目に、湿つた地面につけられた大熊の足跡がうつつた。彼はその足跡を「疲れもしらず、熱心に、疑いや恐怖もいさかず」⁽⁵⁾追いつづけた。そして「彼が永遠にその足跡を見失い、彼も永遠に自分自身を失つてしまうかと思われたその瞬間……突然彼は森の小さな空地に出た。……そしてそこに、あの木と茂みと磁石と時計が、一条の太陽の光線をうけて輝いているのだつた。そのとき彼はあの熊を見た。熊は出てきたのでもなく、あらわれたのでもなく、不動の姿でただそこにいたのだ。緑色の、風のない、真昼の暑いまだらな光線の中に据えつけられたように。……やがて、それは動いた。ゆつくり空地を横切り、一瞬太陽のキラキラ輝く光の中に踏み入り、そこから出て再び立ちどまり、肩越しに振りむいて彼を見た。ついで、いなくなつた。森の中に歩み入つたのではなく、動きもせずに荒野の中に再び沈み、消えていつたのだ。ちょうど、かつて彼の見た魚が、巨大な老いたるスズキが、淵の暗い深みの中に沈み、ひれを動かすことさえなく、消えていつたように。」⁽⁶⁾

ここには、文明人の死と、原始心性によつて捉えられた森の精霊の化身としての大熊が見事に描かれている。アイクが鉄砲をもたずに大熊を求めて長い旅

(1) *Ibid.*, p. 341

(2) *Ibid.*, p. 341

(3), (4), (5) *Ibid.*, p. 342

(6) *Ibid.*, p. 342-3

をつづけ、磁石と時計を捨て、サムから学んだことを頼りに大熊の足跡をたどつていつたということは、彼が文明の殻を脱ぎすて、自然の猛威に対する恐怖と自分の無力感を克服して、原始的自然に生きていく上で必須の条件であるところの、謙譲と忍耐と勇気と知恵を身につけたということにほかならぬ。そのとき彼は荒野に受け入れられ、「出てきたのでもなく、あらわれたのでもなく、不動の姿でそこにいた」大熊を見出したのだ。それは彼の無意識の奥底に潜んでいたところの、古代人の心に捉えられた熊の姿そのものであつたのだ。すなわち、彼は古代人の世界と心理に——人間存在の基本的状態に——復帰し、彼の遠い祖先とおなじように、森の神秘と魔力の権化としての オールド・ベンを見たのである。そしてそれは「森の中に歩み入つたのではなく、動きもせずに荒野の中に再び沈み、消えていつたのだ。」

最初、大熊の一撃に深手を負うて震えている猟犬を見、密林の奥深くでサムに大熊の巨大な足跡を示されたときのアイクの心理は、原始的自然の中に入つていつた文明人の、自然の猛威に対する恐怖と無気力をあらわしているが、以後のアイクの大熊に対する心理的態度の変化は、人類の自然に対する心理的態度の変化を暗示している。初めてアイクが見たオールド・ベンは、古代人の目に映つた神聖な森の精霊の化身であつたが、アイクがさらに高次の人間固有の美德を体得していくにつれ、その大熊は、彼の母親となり、恋人とかわつていくのだ。そしてそのアイクの美德修得の過程は、とりもなおさず人類の精神発達過程の縮図であり、さらにまたそれは、フランティア消滅以前に、アメリカの原始的自然において、白人がインディアンに導かれて体験すべきはずであつたところの、彼らの理想化された精神的再生の第二及び第三の段階でもある。

人類は、自然に埋没して他の動物にも劣る存在状況をいつまでもつづけていたわけではない。その本能以外に、知恵と技とを次第に身につけ、他の動物を殺しながら益々その知恵と技を発達させていつたのだ。同時に、人類はその謙譲と忍耐と勇気という美德の次元を高めていつたのである。なぜなら、他の多くの動物を殺すということは、単に知恵と技とが必要なだけではないからだ。それには、知恵と技のほか動物の本能にまさる忍耐と勇気が必要なのだ。最初には自然の猛威に対して生み出された忍耐と勇気が、その対象の拡大によつて次

元を高められたのである。そればかりではない。古代人の世界においては、生きものの肉体は死んでも、その中に宿っている靈魂は死ななかつた。J. フレイザーが例の『黄金の枝』(*The Golden Bough*)において、殺した動物の靈魂を宥める未開人の礼拝や儀式を列挙しているのは、その証左である。古代人たちは、殺した動物の靈魂から復讐されることをひどく恐れたのだ。しかし、人類は除々にその恐怖感を、動物の生命に対する謙讓の美德にかえていつた。殺した動物の血を飲んだり、自分の体に塗つたりするのは、初めはその動物の能力を身につけたいという願望であつたが、それが次第に動物の生命に恥じない行動を誓う儀式となつたのである。こうして謙讓の美德も、その対象を自然の恣意と力から動物の生命にまで拈げることによつて、その次元を高められていつたのである。そして重要なことは、殺した動物の生命に対する謙讓から、人間としての誇りという美德が生まれ、さらにその謙讓と誇りから、他の生きものに対する同情と愛が生まれたということだ。いいかえれば、殺した動物の生命に対する謙讓と人間としての誇りが結びついたときに初めて、人類はそれまでの動物的状态から脱却して、精神的人間として誕生したのである。謙讓や忍耐や勇氣は、それがいかに強度のものであつても、人間としての誇りと連結しないかぎり、結局本能とかわりはなく、人間の精神的特質とはならない。したがつて、人類が人間としての誇りを修得したときにこそ、人類は動物的状态から精神的人間に向上したのである。各種族のイニシエーションの儀式は、元來これに由来するものであろう。C. G. ユングはイニシエーションの儀式を次のように説明している。

なんらかの形式で組織化されたすべての原始的集団や種族は、しばしば高度に発達したイニシエーションの儀式をもっている。そしてそれらの儀式が、彼らの社会的、宗教的生活において、異常なほどの重要な役割を演ずるのである。これらの儀式によつて、少年は男になり、少女は女になるのだ。カピロンド族 Kavirondos は、割礼にしたがわないものには‘動物’という捺印をおす。このことは、イニシエーションの儀式が動物的状态から人間的状态に人を導くところの魔術的手段であることを示している。それらは明らかに最も重要な精神的意味をもつところの、変改の神秘儀式である。極めてしばしば、この儀式を受けるものは、拷問を加えられる。同時にその種族の秘伝が——一方では種族の掟と制度が、また一方では宇宙的、神話的教義が伝えられる。……キリスト教の現在の形式においてさえも、いくぶん色あせ退化してはいるが、洗礼式とかコンフォメーションとか

聖餐式などの儀式の形で、今なお古いイニシエーションの儀式が保存されている。⁽¹⁾

すなわち、イニシエーションの儀式は、本質的には、動物的状态から精神的人間というより高次の状態への変改を意図したものであろう。人類は初め自然を対象として謙譲と忍耐と勇気を獲得し、次にその対象を動物にまで拡大することによつて、それらの美德の次元を高め、そこに人間としての誇りを生み出した。その謙譲と忍耐と勇気と誇りという美德を、集団や種族に加わる若者に体得させ、その一員としての資格を与えるのが、元来のイニシエーションの目的であり、それに次第に集団や種族独自の特色が加味されて種々の異つた儀式がつくり出されたのであろう。アイクに初めて牡鹿を射たせ、その鹿の血をアイクの顔に塗り、殺した動物の生命に対する謙譲の美德と人間としての誇りを教えた次のサム・ファーザーの行動は、このイニシエーションの本来の意味をよく伝えているといえよう。ある十一月の夜明け、サムはアイクを大きな絲杉のところへつれていつた。サムは牡鹿がちようどそこを通ることを知つていたので。

と、突然、まるで煙のように牡鹿があらわれ、すばらしい速さで駆けてくるのだつた。「よーし、さあ射て、落ちついて」とサム・ファーザーズがいつた。彼はあわてず銃をかまえ、ダーンと射つて、倒れている鹿のところへ歩いていつた。鹿はあのすばらしい速度で駆けていたときそのままの姿で横たわつていた。彼が自分自身のナイフで鹿の血を出すと、サム・ファーザーズが両手をその熱い血の中にひたして、彼の顔に永遠のしるしをつけてくれた。その間、彼は謙譲と誇りを感じながら、震えまいとつとめていた。まだ十二歳の少年であつた彼は、言葉でいうことはできなかつたが、こう思つた。‘おれはお前を殺した。おれの振舞いは、お前が生命を捨てたことを辱しめるようなものであつてはならぬ。今後おれの行動は永遠にお前の死にふさわしいものでなければならぬのだ。’⁽²⁾

アイクが初めて動物——牡鹿を殺してその血をサムがアイクの顔に塗つたことは、『熊』の前身ともいふべき『古老たち』“The Old People”にも書かれているが、上文は『熊』の後篇にあたる『デルタの秋』“Delta Autumn”からの引用であり、八十歳近くになつたアイクの回想として描かれたものである。

(1) C. G. Jung: *The Collected Works*, Vol. 7, pp. 228-9
(Routledge and Kegan Paul)

(2) William Faulkner: “Delta Autumn” in *The Story Pocket Book*, p. 176
(Pocket Books Inc. New York)

『熊』では第二章の初めにこのことが言及され、次のように述べられている。

彼は既に牡鹿を殺し、サム・ファーザーズがその熱い血で彼の顔にしるしをつけていた。……が、その accolade 以前にも、おなじ経験をもっている多くの大人たちと同様に彼は森の生活の適格者になつていた。(1)

この ‘accolade’ 「資格授与式」は、ここでは殺した動物の生命に対する謙譲と人間としての誇りを体得させ、猟師としての資格を与えるイニシエーションの儀式にほかならない。サムがアイクの顔に塗つてくれた鹿の血は、人類が自然における生活を通して獲得した謙譲と忍耐と勇気と誇りという美德——すなわち「荒野の不滅の精神」(2)の象徴なのだ。しかし、「荒野の不滅の精神」は、謙譲と忍耐と勇気と誇りだけではない。それらの美德が関連し、動物に対する同情と愛という美德を生み出したときに、対自然・対動物に対する人間の美德は完成し、「荒野の不滅の精神」の修得が終わるのである。アイクがこの美德を完成し、「荒野の不滅の精神」を体得したのは、フェイス fyce と呼ばれる雑種犬が気違いじみた吠え声をあげ、無鉄砲にもオールド・ベンに向つていつたときである。

彼はそのとき、フェイスが本当にとまろうとしないことを知つた。鉄砲を投げ捨てて彼は駆けだした。甲高い声をあげ、狂つたようになつて玩具の風車みたいにくるくる廻つてゐるその小犬に追いつき、それをつかまえたときは、自分が熊の真下にいるように思えた。熊の強烈な、熱い、くさい臭いをかぐことができた。はらばいになつて彼は熊を見上げた。熊はまるで雷鳴のように、彼の上にのしかかるようにそびえていた。それは全くなつかしい姿であつた。やがて彼は思い出した——これこそ自分がいつも夢みていた姿なんだ、と。(3)

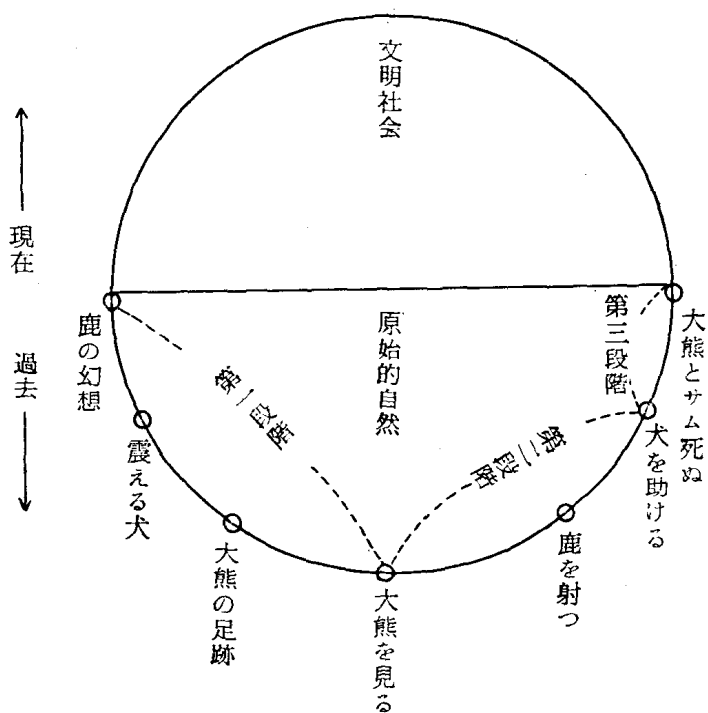
この引用文のすぐ前のパラグラフが、前に引用したところの「その牡熊自体が彼の母校であつた」という言葉で終つているのでもわかるように、ここには母親の胸にいだかれた幼児へのアレルギーがある。いいかえれば、アイクはサム・ファーザーズを父とし、オールド・ベンを母として、対自然・対動物に対する美德を——すなわち「荒野の不滅の精神」を——修得したのである。これまでが、自然における精神的再生の第二の段階なのだ。このように、美德は

(1) William Faulkner: *The Bear in Six Great Modern Short Novels*, p. 343
(Dell Edition)

(2) *Ibid.*, p. 328

(3) *Ibid.*, p. 344

その対象を拡大することにより、また他の美德と関連することによつて、その次元を高め、さらに新しい美德を生み出していくものである。勿論アイクの美德体得の過程は、彼の精神発達過程を示す。しかるに R・スチュワートのように「最高最善の美德は、一種の屈従であつて、その少年が修業を終え、ただ一人で、鉄砲も時計も磁石ももたずに森の中に入つたときに達成されたのだ」⁽¹⁾ というならば、それはアイクの精神発達過程を全く無視した暴言というほかはない。大熊を最初に見たときのアイクの精神は、自然を対象としての謙譲と忍耐と勇気しか発揮できなかつたのに対し、牡鹿を殺したときの彼の精神は、それらの美德の対象を動物に拡大して、人間としての誇りを感じずまでの段階に到達したのだ。そしてさらに、犬を救つたときの彼の精神は、動物や自然に対する同情と愛と名づける美德を発揮できる段階にまで発達したのである。そしてその美德を、同情と呼ぼうが、愛と呼ぼうが、謙譲といおうが、誇りといおうが、あるいは本当の意味の忍耐と定義しようと、真の勇気と称えようと、それは結局おなじことだ。そのことは、これらの美德が互に関連しあつた同次元のものとして修得されているからにほかならぬ。すなわち、この犬を救つた彼の行動は、対自然・対動物に対する美德の完成という精神発達の段階に彼が到達したことを物語っているのだ。しかし彼はさらに、これらの美德の対象を人間に向け、文明社会においてなおその次元を高めねばならないのである。アイクの精神発達の過程は左図のように描くことができよう。



- 第一段階：文明人の死
- 第二段階：対自然・対動物に対する美德の完成
- 第三段階：自然の世界からの脱却の過程

元のものとして修得されているからにほかならぬ。すなわち、この犬を救つた彼の行動は、対自然・対動物に対する美德の完成という精神発達の段階に彼が到達したことを物語っているのだ。しかし彼はさらに、これらの美德の対象を人間に向け、文明社会においてなおその次元を高めねばならないのである。アイクの精神発達の過程は左図のように描くことができよう。

(1) Randall Stewart: *American Literature and Christian Doctrine*, p. 137 (Louisiana State University Press)

この図式において、アイクが初めて大熊を見た事件を中心として、下の半円に対称的に描かれたそれぞれの事件が、全く対照的なアイクの心理を示していることに注意して戴きたい。鹿の幻想を見たときのアイクは、原始的自然に対するあこがれを感じていたのに対し、大熊とサムと犬のライオンが死んだときは、自然の世界から脱却しなければならない必然性をアイクが自覚したときである。震える犬や大熊の足跡を見たときのアイクの心理が、鹿を射ち、犬を助けたときのアイクの心理と対照をなしていることはいうまでもない。次にこの図式における第三の段階を述べる前に、再生過程の原型に関する C.G. ユングの学説を検討しなければならぬ。ユングは、諸民族の太陽神話にこの再生過程の原型が見出されるという。次号においては、そのユングの太陽神話の縮図から考察を始めていきたい。

(1962年1月)